

みんなでトークオーバー・人権こども塾文化祭2023

日時:2023年11月5日(日)12:30受付開始13:00~16:00

場所:徳島県立二十一世紀館イベントホール(文化の森内)

第2部「ハンセン病×原発×じんけん」

「黒尾和久×木村真三×森口健司」スペシャルトーク

《進行:有井温人》

今から第2部である、黒尾和久さん、木村真三さん、森口健司さんによる、「ハンセン病×原発×じんけん」のスペシャルトークを開催します。それでは、よろしくお祈りします。

《森口健司》

語り合い、覚悟がいるけど慣れたら喜びになる

(会場に座る中学生高校生に、温かいまなざしを向け)皆さん、こんにちは。中学生・高校生の皆さん。塾生の皆さん。緊張したと思います。一生懸命語る姿に癒されます。素晴らしいです。いつも強制的にマイクを握らせてごめんなさいね。語るということ、マイクを握って語るということは、一つの覚悟がいります。この語り合いってというのは、慣れていきます。慣れていったら喜びになります。今まで誰にも言えなかったことが、誇りと喜びを持って語れるようになります。

教師になった頃

(しみじみと)私は教師になって42年目です。22歳まで京都で4年間学生生活を過ごしました。部落出身ということを隠し通した4年間です。大学の4年間、出会ってきた仲間は、みんないい仲間です。でも、その場に同和地区の人間は絶対におらんという前提で会話があります。その中で耐え続けました。

教師になった時に、このことを中学生に語るとは、夢にも思わなかったです。でも、ある時に覚悟ができてきます。それは教師になった9年目です。それまで出会ってきた部落の生徒に対して、「この子には」っていう、「この子には何とか」という思いの中で、「先生も部落の人間ぞ」ということを語った

ことはありました。

でもクラスの全員に、学年の全員に、全校の生徒に語るということはなかったです。(ゆっくりと思いを込めながら、一言一言をかみしめるように)でも出会った子どもたちが差別される姿、そういう発言が、そうでない立場のお父さんやお母さんの口から出た時に、「実は、私とその部落の人間なんです」ということを必死に語っていくわけです。語ることによって関係ができていくし、つながりができていくし、何かが始まるんです。私の世界が始まっていきます。

初めての長島愛生園と金泰九さんとの出会い

(いっぱい笑顔で)今日、みんなの語りを受けて、今から黒尾さんと木村さんに語ってもらいますけど、ハンセン病のこと、「ナツノオト」のことに触れてくれた子もいましたけど、実は1998年に、私は長島愛生園に初めて行ったんです。「癩予防法」が廃止されて2年目です。まだ、私の中にハンセン病の差別意識が根強くありました。長島に入る邑久長島大橋を渡った時に、受付の門番の人に、ジロツと、「何ですか?」という顔で見られた時に、「私はとんでもないところに来たんじゃないだろうか」という恐怖がありました。

しかし、そこで聞かされた、当時の中井園長さんのハンセン病の話。そこで出会った金泰九(キムテグ)さんとの出会いの中で、私の世界は変わりました。(力を込めて)「学ぶこと」「知ること」「出会うこと」「つながること」で変わってきます。それ以後、金さんには度々、板野中学校や北島中学校、私の勤務校に来ていただいて、話をさせていただきました。その度に、中学生が必死に金さんに返してい

ます。語り合うという世界がまた豊かな世界をつくらせていきます。

学ぶこと 知ること

今回、黒尾さんに徳島にお越しただいて、みんなと出会ってもらうんですけど、これも同和教育を通してつながった、坂本千代先生との出会いが黒尾さんとの出会いになり、後でまた木村さんと深い深いつながりになっていきます。

(温かい笑顔で)皆さん、人権教育は喜びです。学ぶということは世界を広げます。知るとは、本当に人生を豊かにしてくれます。そんな学びを、今日、また広げて、最後のトークオーバーで、また思いっきり語り合いたいと思います。それでは、黒尾さん、よろしくをお願いします。

《黒尾和久》

はじめに

(立ち上がり、ゆっくりと聞いた中学生の言葉に思いを返しながら)こんにち。黒尾と申します。先ほど素晴らしいお話をみんなから聞かせてもらって、メモも取りましたし、逐一自分に思い当たることもありました。

例えば、動物の命の話は、水族館に勤めたい。そういうことをしたいんだという人たちの中から、動物の命を人間が勝手にしていいのだろうかあって。例えばイルカショー、アシカショー、シャチもそうかもしれないけど、ああいうショーをやっている水族館っていうのは、今、世界的に見ると減っています。特に、ヨーロッパでは、あれは虐待にあたるからやってはいけない。ところが、アジア、日本も含めてなんですけど、水族館の学会が、議論があって2つに割れました。今も継続していると思うんですけど、例えば中国などの水族館はまだやっているんですね。それは、やっぱり命に対する感覚が問われているんだと思うんですね。その国の水族館、政府に関する団体の中で。そういうものに対して目を向けていて、これがどういうことなんだろう。我々がどうするのかということ、考えていくいい入口だし、ずっと考え続けて欲しいし、意見を発信し

て行って欲しいなと思います。

ハンセン病について

(一言一言を大切にじっくりと語りが始まる)ボクが今日話をするのは、「ハンセン病問題」の話なんですけど、ボクはハンセン病患者でも当事者でもありません。「ハンセン病資料館」という展示をするところで生活をする中で、全く知らなかった自分のいた時期もありますし、少しずつ知っていくことによって、その問題の大きさ、知らないことのうかつさをずっと思い知らされてきて、今も知り続けている立場なんですね。

療養所と強制隔離

(中学生たちにわかりやすく言葉で噛み砕きながら、ゆっくりと)日本は、「ハンセン病」という、かつて「癩病」と言われた病気でしたが、その人たちを、「この病気になった人たちは隔離施設に閉じ込めて、そこから出さない」という法律を作って、それを施行してきたんです。その法律ができたのは、全部20世紀です。1907年に、その基礎ができたんですけど、1931年(昭和6年)に、「この病気になったら子どもでも大人でも、おじいさんでもおばあさんでも、とにかく療養所に入って、そこから一生出させんよ」ということになりました。「不治の病」とその頃は言われていました。感染症で今、コロナの話がありますが、コロナはすぐ飛沫感染して、すぐ感染が広がるという意味では、そういう意味では感染力の強い病気なんですけど、「ハンセン病」は、「癩菌」という細菌が感染することによって、それが身体の中で増えていって発病するんですけど、今考えると発病力も感染力も非常に小さなもので、その人たちを閉じ込めて一生出さないような判断をする。そういう誤った判断をするようなことがあってはならない病気だということを、今は、みんな知っているんですね。

プロミンの発見後も廃止されなかった隔離政策

ところが当時は、戦争に負けるまでは「不治の病」と言われて、「この病気になった人は、とにかくお

国のために療養所に入って、そこで生きることは許すけれども、外に出て来るようなことはしないでくれ。それが国のためだ。そこで死ぬ」ということを強要したんですね。完全な人権蹂躪(じゅうりん)です。

(スクリーンの映像を示しながら)1947年に、ボクは資料には赤字で書いていますけど、いい薬ができてきます。その「プロミン」という薬ができてきて、それですべてが解決するわけではないんですが、病気として可治の病気になっていくわけですね。「いい薬ができました。それでこの病気になった人も、ちゃんと治療すれば後遺症なく社会復帰できる」というふうに考えるのが普通なんですが、なんと、1996年まで、その法律が廃止されませんでした。

機会はあったんです。1953年、今から70年前に法律が新しくなったんです。この時に、社会が、あるいはお医者さんが、科学者が、一般市民も含めて「ああこの病気は治る病気になっていったんだから、治った人を閉じ込めておくようなことはやめようね」と判断できればよかったんですが、それができなかったんですね。

ですから、この後、国を相手にした裁判までやって、隔離されたおじいちゃんおばあちゃんたちが勝利する。国が負ける。憲法で規定されている「国賠訴訟(こくばいそしょう)」を勝ち抜いた人たちがいます。国が負けるというのはよほどのことなんですね。それくらい「明々白々」の過ちだったということが明らかになっていくわけです。

(少し考えながら)「ハンセン病になったら、療養所に入所させる。生涯そこで暮らす」「軽快退所」と言って、内々で認められて療養所の外に退所する人も実情は何人もいたんですが、でも、法律上は退所の規定がないので、一度入ったら治っても出られないという、法のたてつけ(ものごとの仕組み)なんですね。「それはどういうこと？」と疑問が起こると思うんですが、例えば、「新型コロナウイルス感染症に感染して入院しました。10日間入院して、だんだん良くなって、もう他人にもうつしません。治りました」となったら、「いや、あなたは治ったけれど、法律上、一度この病気に罹ったら外に出られ

ないというたてつけになっていますから」と言って一生退院させてもらえない。平たく言うと、ハンセン病というのはそういうものだったんですね。

群馬の国立療養所栗生楽泉園の重監房

今、「ハンセン病療養所」って全国に国立が13カ所、私立が1カ所機能しています。実は戦争の時代、日本が植民地をもっていた時代、例えば今の韓国にも今の台湾にも日本の隔離施設はありました。今も両方とも機能しています。

今日お話しすることになるのは、群馬の国立療養所栗生楽泉園と東京都の国立療養所多磨全生園と、徳島に近い香川の国立療養所大島青松園になります。先ほど、森口先生が金泰九さんの話をしてくれたのは、岡山の国立療養所長島愛生園の話でした。先ほど、栗生楽泉園の紹介をしていただきましたけど、実は、「重監房(じゅうかんぼう)」というものがありません。「特別病室」と言われていたんですが、患者さんの中には、園の言うことを聞かないとか、いろいろな理由をつけられて、そこに閉じ込められる。隔離施設自体が隔離されて閉じ込められているのに、さらに、その中から選りすぐられて、園の言うことを聞かないという理由で閉じ込められる監獄があったんですね。牢屋です。それが「重監房」です。

(雪景色の栗生楽泉園が映し出される)その重監房について再現施設を持つ資料館でボクは働いています。(映像を示しながら)草津は標高1000m以上ありますので、冬になるとこんな感じです。牢屋に閉じ込められた人は、ろくに暖房器具もないところで、体感で零下20度近くなるような状況で、次々に凍死するなんていう記録が残っています。その栗生楽泉園には納骨堂と、そして、「命返しての碑」というのがあります。

どの療養所にもあった 納骨堂の意味

国立の療養所だけでなく、ハンセン病の療養所には必ず納骨堂があるんですね。「納骨堂」というのはお墓です。つまり、亡くなくても誰にも迎えに来てもらえない。家族との縁が絶ち切れてしまってい

る証拠なんです。そして、この「命返しての碑」というのは、実は療養所に暮らした男の人、女の人。今はおじいちゃん、おばあちゃんになってしまっていますけれども、結婚は許されんたんです。結婚は許されたんですが、子どもを持つことが許されなかった。これもひどい話です。なぜ、そんなことをしてしまったのかというのは、「優生保護法」という法律もあったんですけども、それについても皆さん、後で「どうしてそうなの？」と思ったら、そういうものも調べてみていただきたいなと思います。

けれども、不幸にもお腹に赤ちゃんが入ってしまった場合には、強制的に中絶をさせられる。その中絶をさせられた赤ちゃんが、ホルマリン漬けになって残っていて、それが裁判の後出てきたので、それを供養した。「命返しての碑」というのはそんな碑です。

(次々に映像を切り替えながら)群馬の栗生楽泉園の納骨堂です。多磨全生園の納骨堂です。こういう施設が各療養所にはあります。「病院なのにお墓がある」という意味を、考えて欲しいんですね。隔離されてしまい、家族との絆が絶ち消えます。家族に会えない。

本人だけじゃなく、家族も地域社会で差別を受けました。「あの家は、この病気を出した家だ」ということで、差別や偏見を受けるんですね。偏見差別の嵐で、非常に辛い思いをしたという人もたくさんいます。

ハンセン病 強制隔離がもたらすもの

ですから入所した患者さんたちは、家族のことを思って、自ら家族と連絡を取らないことで家族を守る。逆に家族の方も、その子がいなかったことにして耐える。そんなことをするんですね。そして、死んでも出られない。そして、本名が名乗れない。これも、「園名」という言葉があって、親からももらった名前を名乗らないで療養所で暮らしている人がたくさんいます。

なぜ、そんなことをするのか。それはやっぱり、自分が誰であるか知られると家族に迷惑がかかるから、そういう思いからそういうことにするという話

を、誰からも聞いたことがあります。そうやって家族や地域、故郷と、どんどんどん関係が絶ち切れてしまう。

そんなところでずっと生きてきたおじいちゃんおばあちゃんたちの1人に、先ほど森口先生が言った金泰九さんもいたんですね。その金泰九さんが素晴らしい人だったと森口先生も話していました。その話なんかも、これから森口先生なんかと議論する中でしてもらいたいんじゃないかなと思います。

アニメ「千と千尋の神隠し」に込められた思い

ハンセン病のことを考えた時に、1つ大事なアニメがあります。「千と千尋の神隠し」という映画なんですけど、宮崎駿監督は多磨全生園の入所者自治会の方と非常に懇意にしている、「もののけ姫」と「千と千尋の神隠し」という映画を創っています。

実は湯婆婆の湯屋。主人公がここにいる、千尋という名前を取られちゃって、「千」という名前で働くんですけど、この場所は、「多磨全生園」だと思って見ていただくと、「ああ、そういうことだったのか」「これはどういうことなのかな」と重ねてみるができます。

「千尋さん」という女の子は、名前を取られました。入園して「千」になります。これは、「園名」を名乗るということと同じです。園名を名乗りながら、仲間の手助けを借りていきながらけなげに働き、そこで自分の名前を取り戻すきっかけを得て、「千尋」という名前を取り戻してシャバに帰る。社会に帰ると一緒ですね。

(画面に映しだされた、湯屋のみんなに笑顔で見送られながら、主人公の千尋が笑顔で力いっぱい父と母のもとに走り出すシーン)このシーンは、エンディングのなかなか感動的なシーンでもあるんですけども、宮崎監督は、実はこの映画に裏のサブテーマを、たぶん持っているんだと思うんです。

アニメ「千と千尋の神隠し」に込められたと思われる裏のサブテーマ

実は、後ろでカエル顔のおじさんとか、おかめ顔のお姉さんが手を振っていますけれども、「ハク」

した治療をして、優しくその人の話を聞いてあげたり、そういうふうにする場所が必要なんだよ」というメッセージがそこに込められていて、実際にそういうところがあったのかなという感じもします。

小説「ナツノオト」に寄せて

そして「ナツノオト」です。これは、吉成先生のご本ですけれども、大島青松園が舞台です。

東 恭恵(よしえ)さんですか。この方が入所者の方で、園名です。

実は、立花源治さん(主人公渚の祖父)の2歳上のお姉さんに恭子(きょうこ)さんという方がいたんですが、家族の間ではいなかったことになっていたんですが、実はその人がハンセン病になって、大島青松園に入所している。それを主人公の渚さんがいろいろな経緯があって知ることになるんです。

じいちゃんは家族にその話を黙っているわけです。お父さんも知りませんでした。お父さんは、敏子という2歳上の姉を水難事故で亡くしているんですが、まさか自分の親父にもお姉さんがいたなんて聞いたことがないという話が出てきます。

渚さんは、恭恵(よしえ)さんと恭子(きょうこ)さんが同一人物であること、それを発見した時に、12歳の恭子(きょうこ)さんも、自分なりに決意して、名前を、家族を、故郷を、自分を捨てようとした。そうすることしかできなかつた。そういう時代だった。

「癩予防法」が機能して、この病気になった人は、家族と引き裂かれて療養所に入り、もしかすると家族も、「この病気を出した家だ」と言ってひどい目に遭うので、家族もそれを伏せているし、療養所に入った方も、それを黙っている。親からもらった名前とは違う名前に住んでいる。ただ1文字「恭」という同じ字を使っているところに、つながりを残しておきたかったのではないのかなということ、渚さんが気がついているわけですね。

療養所に入所中の子どもたちの現状と思い

療養所に入所中の子どもたちの書いた詩や作文の中に、こんな詩があります。

友だち
手すりにもたれている友
目隠しようと思って
そっと後ろに回ったら
手紙を持って
泣いていた

尋常小学校6年生女子作

小学生か中学生子どもが、親元を離れて入所する。そこに親から手紙が来るんですね。その手紙をもらった友達が、手紙を持って泣いている。この手紙をどう読みますかということ、中学生とトークイベントをします。するとある女の子は、「自分のところには親から手紙なんか来ないけど、友達のところには来ている。ちょっとうらやましいけど、良かったね」そんなふうなことを読んだんじゃないかと言うんですね。でも、実際にたくさん残されている手紙の中で、こんなのがあります。

「〇〇、お父さんだよ。元気でやっているか。

悪いけど、お前はいないことにする。死んだことにする。

そうしないと、お父さんの仕事もお姉さんの縁談も立ち行かない。

だから、はなからいないことにする。

もう手紙を書くこともない。

悪く思わんでくれ 父」

もし、その手紙を持って泣いていた友達が、そういう手紙をもらって泣いていたとしたらどうでしょうか。しかも、千代子さんはなんとかちゃんにも、そういう手紙が来ちゃったんだということがわかっていて、こういう詩を書いたとしたら、どうでしょうか。

こういう気持ちを抱えながら、故郷や家族と絶ち切れる。あるいは、家族の方も「仕方ない。我慢してくれ」と言う。それで納骨堂がある。死んでも還れない。親からもらった本名が名乗れない。そんなことが、ずっと今も続いてきた。2度と、こんなこ

とを繰り返しちゃいけない。

小説「ナツノオト」に描かれた「こんな日がこよとは」が問 いかけるもの

小説「ナツノオト」の中では、最後、立花源治さん(主人公渚の祖父)がウナギをさばく準備をしてつぶやくんですね。「こんな日が来ようとは」。

(「ナツノオト」の表紙が画面に映し出される)この小説の外装のベルトというか、紹介をしてくれと言われて文章を書く時に、初めて手にして読んだのが、だいぶ前になりますけど電車の中でした。この本のような体裁のものを、このおじさんが電車の中で読んでいるのは、ちょっと恥ずかしかったんですが、読んでいって最後のところ。「こんな日がこよとは」というところで、涙腺が爆発してしまいました。

この立花源治さんの気持ちがドッと入ってきちゃったんですね。つまり、絶対に来ないと思っていた日。生き別れた妹が、生きていることを家族にも知られたけれども、その家族が自分の姉に会いに来て、その姉が帰ってくるのを準備する日が来る。

「こんな日が来ようとは…」

ボクらにも、もしかしたら、「こんな日が来て欲しい」と思うことがあるんじゃないのかなと思うんです。誰にも。「将来、こんなふうになって欲しい」「将来、こんな日が来て欲しい」実は、人に言えないようなことってそういうことです。つながっているんじゃないのかなと思うんです。

「こうあって欲しい」「こうなったら嬉しい」

なかなかできないけど、たぶんそういうものがこの本に詰まっている。逆に言えば、人をそんなふうな思いにさせてはだめだということです。ハンセン病の問題ってまさに、「では誰がそうさせたの？国が法律を作ってそうしたの？」と言うけれども、法律を支持して、その人たちを町から追い出し、療養所に追い立てたのは我々市民の側ですね。あるいは、医師や保健担当の人も、危ない病気だから、危険な病気だからと、過剰に間違った教育をした結果、偏見、差別がずっと根強く残ってしまった。

とっくの昔に病気は治っているのに、もしかした

ら、見た目の病気だったのかもしれない。いろんなことを考えながら、「こんな日が来るとは」、もっといろんな人権問題に、こんな日が来なければならないよね。そんなことはたくさんあると思います。ハンセン病の問題を手掛かりに少し話をさせていただきました。ありがとうございました。(丁寧にあいさつをし、ゆっくり席に着く)

《森口健司》

(黒尾さんの思いを受けて)ありがとうございました。やっぱりすごい集いですね。「人権こども塾」。本当に幸せな時間を過ごしています。

手元のテーブルから(「ナツノオト」と「ペットボトル・マジック」2冊の本を取り上げ会場に示しながら)この「ナツノオト」の本、響きますね。もう1冊、福島のことを書いた「ペットボトル・マジック」という小説があります。これも塾生の皆さんに読んでもらっていますけど、是非、家でも読んで語り合ってください。

福島のこと、原発のこと、この後、木村さん、よろしくお願いします。

《木村真三》

問いかけ 福島で起きていることの実情を知っていますか？

(黒尾さんからマイクを受け取り立ち上がると、ゆっくりと語り始める)私の方は、ハンセン病の話はほんの一部触れさせていただきましたが、今日、皆さんに、特に中学生、高校生の皆さんに知ってもらいたいことを、これは「どういうことが起きているのか」「今、この福島で起きていることの実情を、あなたたちは知っていますか？」ということをお聞きする時間です。

(「福島原発事故は人々から何を奪ったのか」という問いかけが大きく書かれた写真付きの映像を示しながら)これは何をしているかわかりますか？手前にいるのは私です。奥の上の方にいるのは、地域の住民と一緒に立ち会っているところです。(画面の木や草で覆われたところを示しながら)実は、ここに家があるんです。これが12年半たった福島の実

態なんです。住民が立っているこの前に人が住んでいたんです。営みがあったんです。しかし、ここの人たちは放射線量が非常に高く、放射能が降り注いでしまったということで、家を奪われて、またコミュニティというものがなくなり、そして隣同士、親戚同士も離れ離れになってしまったという事実があるわけです。

今、私が映像の中でやっているのは、「いつか還りたい。いつか還れるようにするために、先生、悪いけどこれ測ってくれないかい？放射能さ、どれくらいあるか見て欲しいんだ」と頼まれ、「わかった」と言って、これは1年かけて、この地域は広さにして、そうですね、東京ドーム数十個分の広さがある。そこに550軒の家がある。

それ以外にも、公共施設や小学校や高校の分校、中学校、そういうものがあつたり、保育所もありました。そういったところも全部含めて約600カ所を、全部歩いてくまなく調べていくという作業を、実はこのゴールデンウィークまでやりました。

東日本大震災の起こった2011年3月11日

皆さん、こういったことが起きた時っていうのは、ここにいる中学生、あなたたちはまだ1歳。高校生で言っても、せいぜいまだ3歳。その位の人たちなんです、2011年3月11日、東日本大震災が起きました。

(切り替わった画面を見ながら)これは震災翌日の新聞ですから、まだマグニチュード9.0という数字は出ていません。この画面上の新聞に出ているマグニチュード8.8は予測値です。推定値です。そして、ものすごく大きな津波が起き、多くの命が奪われ、家が奪われ、そして福島では3月12日、福島第一原子力発電所で爆発事故を起こすと。

福島第一原子力発電所爆発事故が福島にもたらしたものの

福島というのは、津波にもあい、家も流され、多くの被災者が出てきたし、死者も出ました。しかしながら、さらに追い打ちをかけるように原発事故が起きた。(画面上の福島第一原発1号機から4号機

の図を示しながら)今日は時間の関係でできませんが、普通は、これを小学校や中学校で授業をやるわけなんです、クイズ形式にします。

さて、いくつ原発が壊れましたか？

今日は、わずか20分しかしゃべれない。だからこれも省きます。要は、4つ壊れてしまいました。(会場の中学生・高校生に向かって)あなたたち、4つ壊れたって知っていた人がいますか？

(手を挙げた人に向かって)知ってた？すごいね。

実は、2つは大爆発をしました。4号機は、「小規模爆発」というふうに言われていますが、実はここは、定期点検中で、使用済み核燃料と、使用中の核燃料を、この4号機のプールに入れていたんです。このプールの水がどんどん干上がるということで、メルトダウンが起きる可能性があつたんです。だから、この4号機というのは、非常に重大事故につながりそうだったんです。でも、そこで福島を汚染させたのは、この3つじゃないんです。多くは、2号機なんです。この2号機はメルトダウンを起こして、実は大きな穴が開いて、そこから大量の全くフィルターを通さない無濾過の放射性物質が福島を襲いました。

(画面を切り替え)これが甲状腺癌のもとになる「ヨウ素131」の動きです。向かって左側が、上空1mの様子。右側が地面を汚染させた様子というように、この示している図はシュミレーションです。皆さん、見てください。東京も汚染されているんです。

皆さん、不思議と思いませんか？なぜ、福島だけが汚染されていると言われなければならないのか。おかしいでしょう。これだけの汚染があるんです。群馬も岩手も宮城も、そして千葉も東京も、みんな汚染されているんです。

情報は誰のもの？

でも問題は、福島だけの問題とされている。何かおかしいと思いませんか？それで、「情報は誰のもの？」というふうになると、(画面が変わり、東京電力の説明場面と、専門家のコメント場面が映し出される)「直ちに影響はありません」これが繰り返

しニュースで流れました。もちろん、あなたたちは記憶にないかもしれない。ただし、我々大人たちはずっとずっと聞いているわけです。

でもね、この「直ちに影響がない」というのは、「今すぐは影響がありません」。じゃあ5年後、10年後、20年後、影響はどうなんですか。全く言っていないんです。だから、置き去りにされたんです。そして専門家の人は現地に入って、「放射線の影響は、実はニコニコ笑っている人には来ません。クヨクヨしている人に来ます」これはウソではありません。なぜ嘘ではないのかというと、放射線被害を受けたのは全員にあります。しかし、心を病んでしまうことに対しては、クヨクヨしている人には、もちろんメンタルストレスと言って精神を病むことがあります。という主語が抜けているんです。だから、この場面を聞いている人は、みんな「放射線の影響というのは大したことはないんだ」思ってしまうんです。住民も思ってしまうんです。

避難指示が今年ようやく解除された「飯舘村」という村があります。(力を込めて)この飯舘村は、「皆さん、この放射能の影響は、毎日たばこを20本吸っているよりも影響が少ないんです」と専門家が言ったんです。そしたら、家を奪われ、土地を奪われ、帰ることのできなかつた人たちは、「何で、俺たちはたばこと同じくらいの影響で、家さ奪われたのかい？そしたらことねえべ」と言う。これが事実なんです。そんなことないんです。そういうことを、平気でウソを大人たちは作るんです。専門家たちも言うんです。ボクは、その科学者の1人なんです。だから科学者が大っ嫌いです。

東海村臨界事故調査から考えさせられた「人の命とは何？」

(画面が変わり、画面上に「東海村臨界事故調査に立ち向かう」「チェルノブイリ原発事故研究(主に人体影響)」「研究開始から25年」の文字が表示される。その画面を見ながら)自己紹介になりますが、ボクは、なぜこの仕事を自分の生涯の仕事にしたかという、実は1999年9月30日の東海村臨界事故という、日本で初めて死者が出たという事故がありま

した。

私は、この時いち早く現場に入って現地調査をしました。それだけじゃないんです。これから83日目に患者さんが被ばくで亡くなられたんです。その遺体を引き取りに行ったのが私です。人が死んでいく姿を見て、(手で1つのチューブを持ち上げながら)こういうチューブに入った、こういう小さなかけらになった指とか、様々なものを目の前で見せられて、「はい」と渡され、「これはあなたが被ばく量を調べるために使ってください」というふうになった時に、「人の命っていうものはいったい何なんだろうか」と考えるようになりました。

実は私は、原子力推進派です。科学技術とはすばらしい。科学の力によって我々の生活を豊かにするってことを考えて。しかし、実際は人の命を奪っても、それをコントロールできていないという事実を知った時に、「これは大変だ」ということで、そこで改めて原子力について考えてみました。

原発事故の研究を始めた頃の科学技術庁職員とのやり取り

原発事故というのを考えようとしてやったのが、今のチェルノブイリ原発事故、昔で言う「チェルノブイリ」です。ここで研究を始めて25年。四半世紀が経ちました。この現地に行くのが約70回。ウクライナに70回、ベラルーシを含めて約85回くらいかな。現地と2重生活をしていました。福島事故後もずっと通い続けています。今は戦争になって行けない。コロナになって行けないというところで、たくさんの私が見てきた人たちが亡くなりました。

この画面の映像は、これは福島事故のあった右の4号機の中央制御室の中で2020年に撮った写真です。こういうふうに、人の命を奪うというのに対して、きちんと向き合うということが必要であるということで、いつか必ず原発事故が起こるかもしれないと考えて研究を始めました。

当時、ボクは科学技術庁の職員です。科学技術庁というのは、原子力政策の中心となる場所でした。経済産業省というのは、原子力エネルギーを使うところです。しかし、原子力開発をするのは科学技術

序。(徐々に力が入り、身体中でほとぼしるように) その職員で医学者として働いていたんですが、チェルノブリーの研究をする時に、「木村くん、こんなことをやったって何になるの？事故から13年経っていて、もう事故は終わりました。やる必要ないでしょ」と言われた時に、「あなた方、本当に学者ですか？」と言ったんです。まだ駆け出しの科学者でした。その私に、そんなことを言った人たちに言ったのは、「わずか13年で何がわかるんですか。長期的な人体影響をあなたたち言えるんですか。広島、長崎の原爆のことを考えたら、もっと考えなきゃいけないでしょう。だからやる必要があるんです」と言って、それが認められて研究が始まったんです。

ということで、「いつか必ず日本でも原発事故が起きます。そのために今から研究しなければいけないんです」と言ったら、「木村くん、それはチェルノブイリという、ソビエト連邦で作られた特殊な原発が事故を起こした。日本の原発はアメリカが作ったもので、アメリカのオリジナルがあって、それを改良してきたものだから事故なんて起こらない」と言われたのが、結局12年半前事故が起きました。

原発再稼働や、壇上で話したことをどこまで「わがこと」にできたか

事故が起きた時に3日目には、原発から2,4km地点まで行ったんですが、調査をしました。実際に原発事故から10年経って、今、日本の政府は何をしようとしているかという、福島を置き去りにして原発再稼働に舵を切るようになりました。福島では新聞社が2社ありますが、その中の「福島民報」の記事ですが、「原発9基稼働でも逼迫」短期的な経済成長に対して、国が「原発を動かせば電力供給が上手いく」と言い続ける。本当にそうなのか。

今現時点では、「グリーントランスフォーメーション」実行会議というところで、エネルギー転換。「自然エネルギーを使います。その自然エネルギーを使うためには、その中継ぎが必要です。中継ぎのためにはやっぱり原発が必要なんです」と言って、原発を始めるわけです。徳島には原発がありません。(力強く)あなた方の近くになくても、同じ四国の中

でも愛媛県に伊方原発があります。これを「わがこと」に捉えられるかどうかです。あなた方が自分たちでどう受け止められるか。あなた方は壇上で立派に話をしました。でも、ここで話を一つ一つしたことに、どこまで自分の「わがこと」にできたかということです。あなたたちが自分で考えてください。

それで、こういうことが起きて、「健康被害は認められない」と言って、原発の事故は、どんどんなかったことにする。そして幕引きを図る。そんな中で、原発の中から出てくる汚れた水。それを処理して海上に放出するという「処理水問題」というのが出てきました。経済産業省の幹部は、「沿岸だと流しているところをマスコミに映像や写真で撮られる。1キロ沖の海底ならその心配はなく、風評の観点では違いがある」と話す。別の幹部は、『岸から離れて出した方が影響が小さいイメージがある』という地元の意見があり、より安心してもらえそうな方法を取った」と言って、海洋放出を始めました。

国の顔を見ていることで起こること

これをキミたちは科学だと思っ？科学者になろうと思っている人たちがいる。でも、これの何が実態なのかという真実を見ない。今話したことはスクープ報道なんです。毎日新聞社のスクープ報道なんです。でも、これは今しゃべられていない。本来マスコミって、こういうのを伝えなくてはいけない。でも黙ってしまう。それは誰の顔を見ているのか。国の顔色を見ているんです。では国の顔色を見ていたらハンセン病って、こんなことが起きたか。起きないんですね。同和問題って起きたか。起きるわけないんです。だから、その部分というのが根っこが一緒になっているんです。そこをきちんと考えて欲しい。

帰還困難区域 浪江町津島地区の人々の苦悩 本当になくしたものは何か

福島第一原発は今も大量に放射性物質を海洋放出されているという事実を報道しました。あるNPO法人の研究を読み込んで、実際に本当にありうるということを確認しました。実際に、そういうことが

報じられない。そして幕引きを図る。それでは家を奪われた人たちはどうなの。(画面に「帰還困難区域、浪江町津島地区の人々の苦悩」という文字と、津島地区の地図が映し出される)津島地区の98%が帰還困難区域。今、わずか1.6%が「特定再生拠点区域」と言っても、わずか1.6%を徹底的に国が除染して。除染というのは、表土を剥いで放射能がくっついた土を全て取り払い、様々な部分を放射能を除去していつか住めるような形にするということなんです。それでも還れない。その還れないのが浪江町という町の画面上に赤で囲った津島地区なんです。

なぜ私がここに関わるか、こだわるか。事故があったその年の3月末、建物の外にはものすごい放射能があるところで、まだその実態を知らされずに避難している浪江町の人々がいた。そこを一生懸命説得して再避難をしていただくところをやりました。まあ、こういう関りがあったから今始めているわけですが、こうやって、つるや草で覆われた中で1軒1軒を回るとするのは至難の業です。夏はボクが行った一番暑い時で37℃。気が遠くなります。秋には、スズメバチです。このスズメバチに刺されるとドクターヘリが飛んで来ないんです。ドクターヘリで救急搬送できないんです。だから調査できないんです。冬は地面が凍って、一番寒い時がマイナス15℃。地面が凍ると放射性物質が閉じ込められる。だから活動できる時間、動ける時間というのはすごく少なかった。ということで、今年のゴールデンウィークで全てが回れて終わりました。

こうしてくまなく歩いて行ったのが、この画面の放射線汚染地図になっているわけです。(身体中で問いかけるように)とてつもない高いところが存在するということがわかったのですが、でも本当になくしたものは何か。心なんです。

(画面を見ながら)これは私が懇意にしている浪江町下津島行政長官さんのお話です。

彼の家は、築150年の松本屋旅館という旅館があります。そこで代々ひいじいさんの建てたこの家を守るということで、今でも先祖供養をやっています。

これはお盆に行った時の写真です。そして、彼が言うには、

「喪失感というには何か足りず、何と表現していいかわからない。3日くらい戻って来られると思った避難生活も12年6か月となりました。

先祖が残してくれた我が家をそのまま放置しておくこともできず、地元に残る五穀豊穡を祈る『田植え踊り』は、集落ごとに振り付けや歌詞が違う。皆、それぞれの田植え歌踊りが最高と言う。自慢していた。

それも、てんでんばらばらとなつては、継承もできない。長男は、子どもたちの放射線被ばくを懸念し、福島へは行かないと言う。

(一度も原発事故後、福島に来ていません)たぶん、もう福島へは戻ってこないだろう」ということを涙ながらに語るんです。こういう実態があるということ、知ってください。

今日、一番に伝えたいこと 通底する問題に目を向けよ

そして、キミたちに言いたいのは、(切り替わった画面を示しながら)

「通底する問題(底にあるものは通じている問題)に目を向けよ」

原発事故は、福島の人々から家を奪い、コミュニティを奪い、そして、自然を奪った。ボクの医学者としての立場からは、健康も奪ったと思っています。これは、あくまでもボクの個人的な見解です。

しかし、「ハンセン病に目を向けると、患者の自由に住む権利を奪い、コミュニティを奪い、そして、患者の子どもを産む権利さえ奪った」よく似ていますね。通底するんです。

では、広島・長崎の被爆者はどうなんですか。「放射線被爆による遺伝的影響を恐れた人々は、被爆者の妊婦に対し堕胎を強要しました。さらには、遺伝的影響があつてはいけないうって、家から放り出される女性たちが出てきました。離縁をさせられた。こういうことがあつて、生きる希望を奪われる。同じことなんです。

そこで、ボクがいる福島の二本松市の子どもたちが、キミたちと同じ中学生、高校生の子どもたちが、

泣きながら私に訴えてきました。(胸がいっぱいになり涙をこらえながら)「先生、私たち子どもを産んでいいんですか」「結婚していいんですか」同じことを言っているんです。「福島の人としか結婚できないんですか」「私たちは、自由な恋愛はできないんですか」こんなことが起きているということを誰も知らないんです。

(会場より大きな拍手)

(精いっぱい思いを込めて)福島は終わったことだというだけで。これがおかしいということで、ボクはあえて、ハンセン病だった家族の話をするようにしました。痛みを分かち合うというか、心というもの、相通ずるところ、通底する問題というところを見据えるためには、あえて自分の過去もしゃべらないといけない。というところにつながるわけです。だからこそ、キミたちに考えていただきたいのは、どうやってわがことにしていくか。わがことにするためには、何をするか。それは、自分に起きた一つ一つの出来事を自分に置き換えていくこと。これがハンセン病でも、原発でも、被ばくでも、一緒なんです。そこに置き換えた時に、「あの事象はこの事象と同じだね」と思うことができるかできないかが、人の人生に変わってくるんじゃないかなというのが、ボクの今日のメッセージなんです。

これはね、本当はもっともっと巨大です。すごいことがいっぱいあるけれども、それは、「原発事故」というよりも、「原発事故によって失われた社会の方が大きい」ということだけはキミたちに知っていただきたいということで、今日のお話は終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

《森口健司》

ありがとうございました。この後すぐに、第3部のトークオーバーに入ります。やっぱり、自分の言葉で自分自身のことを返していく。そんな語り合いがみんなの中に沁み込んでいく。今日、本当にここへ来てよかったという思いが、私たちの中に広がっています、そんな語り合いをしたいと思います。

それでは、第3部の準備をしたいと思います。2人に拍手をお願いします。ありがとうございました。